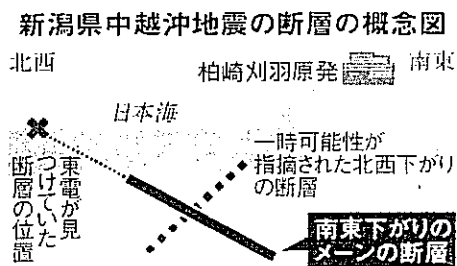


読賣新聞

2008年(平成20年) 1月11日 金曜日

中越沖地震 「断層の正体」決着

昨年7月に起きた新潟県中越沖地震を起こした断層の傾きは、主に南東（陸側）に向かって下がっていることが、東京大学地震研究所や産業技術総合研究所など複数の研究機関の解析でわかった。断層の傾きをめぐって、専門家の間でも見解が二転三転していたが、発生から約半年たち、ようやく正体ははっきりとした。11日の国の地震調査委員会で報告される。



陸向き南東下がり 発生半年で解析

東大は、地震後に設置した海底地震計の余震記録を分析。産総研は船で海底の地下構造を調べ、震源域西隣の海底下にたわんだ地質構造を見つけた。いずれも、断層は主に南東傾斜であることを示すという。

南東傾斜の断層の延長上にある海底では、東京電力が過去に断層を見つけており、産総研断層研究センターはこの断層が動いて、中越沖地震が起きた可能性が高い。東電が、海底の地質構造から断層の傾斜を推定していれば、中越沖地震と同規模の地震を予測できたはずだ」としている。

地震調査委員会は地震直後に「震源断層は南東傾斜」とする見解をいったんまとめたが、北西傾斜を示すデータもあり、その見解を3週間後に取り下げるなど、専門家の間でも意見が分かれていた。